



高校生留学



マッギル大学 名誉教授

高根芳雄 (たかね よしお)

東京大学文学部心理学科卒業。Ph.D (ノース・カロライナ大学)。マッギル大学で教授等を歴任。現在、ビクトリア大学でAdjunct Professor。専門は計量心理学。著書は*Projection matrices, generalized inverse matrices, and singular value decomposition* (共著, Springer) など。

前哨戦

これは私が大学で心理学を専攻することになるうとは夢にも思っていなかった頃の話である。したがって本文の趣旨とは一見無関係のようにも思えるが、その後アメリカの大学に留学し、カナダの大学で教えることになった源流を辿っていくと、どうしてもこの時の体験に行き着かざるを得ない。

私は1963年の夏からほぼ一年間アメリカ留学を果たした。当時私は都立小石川高校に通う高校生だった。「果たした」などという多少大げさに聞こえるが、高校生のアメリカ留学は当時としてはかなり珍しかった。1963年といえば日本もそろそろ戦後20年の節目を迎え、もう戦後ではないという声がちらほら聞こえ始めた頃のことである。ちなみに東京オリンピックは1964年だった。まだ1ドル360円の時代で、私費で留学するなどということは大部分の日本人にとって夢のまた夢という時代であった。

ところが別の意味で夢のような制度が存在したのである。それはAFS留学制度といって英語のヒアリング・テストと面接に合格しさえすれば、殆どただ同然で高校生を一年間アメリカに留学させてくれるという制度であった。AFSはAmerican Field Serviceの略で、もともと第一次世界大戦中に戦争で負傷した兵士の救護団体として発足した。ところがその後戦争で負傷した兵士の救援よりも戦争を起こさない世界を作るほ

うが大切だという考えに変わり、世界的な規模で高校生の交流を図るための制度を作り出した。しかもAFSはどこかの政府にも頼らず、全ての活動は民間の寄付と有志者の奉仕によって支えられている。

私は一も二もなくこの願ってもない可能性に飛びついた。その頃の日本の高校生活といえれば何と云っても大学受験が重くのしかかり、灰色の高校時代などと呼ばれていた。それに対し時折耳にするアメリカの高校生活の楽しそうだったこと。また当時『パパは何でも知っている』とか『うちのママは世界一』というアメリカのテレビ番組が流行っていて理想的なアメリカの家庭生活に惹かれた人が多かった。私は一時的にも受験の重圧から逃れたいという気持ちとアメリカ生活への憧れから強く留学を希望したのである。さらに私が通っていた小石川高校は進取の精神に富んだ校風で、AFSでアメリカ留学を体験してきた先輩が二年上に三人もいて、直接体験談を聞いたり手記を読んだりする機会があり、私の留学熱はいやがうえにも高揚した(ちなみに小石川高校からAFSで私と同じ年に留学した生徒は他に二人いた)。

しかしAFSの試験に合格するのはかなり難関であるという評判だった。私はアメリカに留学したい一心で、考えられるあらゆる手段を使って英会話の勉強を始めた。その頃ラジオでは『百万人の英語』という番組がありそれを毎日欠かさず聴いた。テープレコー

ダーを買ってもらって番組を録音してそれを何度も繰り返し聴いたりもした。『エデンの東』という映画の脚本を手に入れ、懐中電灯を持って映画館に行き何度も繰り返し台本を追ったり、日曜日には成増(東京都板橋区)にあったグラントハイツ(米軍家族の居留地)に入り込み、あたりで遊んでいる子どもを相手に英会話の練習をしたりした。また当時住んでいた家の近くに王子キャンプという米軍基地があり、夕方、門の近くで帰ってくる米軍兵士を待ち伏せしては自分の英語が通じるかどうか試したりした。またFEN (Far East Network) という在日米軍向けの放送でニュースの聞き取りに挑戦したりした。当時はFENのニュース・キャスターがニュースを読むスピードがあまりに速いのに仰天したものである。こうした努力の結果(?) 私は何とかAFSの試験に合格し、アメリカ留学の切符を手に入れたのである。

渡航

私は1963年8月末、JALのチャーター便で他の130余名の日本人留学生と共に羽田空港を発ちホノルル経由でサンフランシスコに到着した(当時は太平洋をnonstopで横断する便はなくホノルルには給油のため数時間だけ立ち寄ったものである。今更ながら航空技術の進歩には目覚ましいものがある)。その後われわれはバスで2時間ほどのところにあるスタンフォード大学で数日間オリエンテーションを受けることになってい

た。私は当時この大学が世界でも有数のエリート大学であることを全く知らなかった。初めて着いた時、その広大な緑一面の芝生に圧倒されたのを今でも鮮明に覚えている。世界にはこんなきれいなキャンパスをもつ大学があるとは思ってもみなかった。われわれが泊まった宿舎も広々として清潔そのものだった。オリエンテーションの間他に留学生仲間と共に三々五々輪になって芝生に座り、カリフォルニアの涼しい夏の陽光を浴びながらこれからのアメリカ生活について語り合った。われわれのアメリカ生活はスタンフォード大学のキャンパスから始まったのである。

私はここで「貴重な」体験をした。カフェテリアというものを生まれて初めて経験したのである。そこには食べきれない程の食べ物と飲み物だけでも数種類あった。私はそれを全部取らなければいけないのだと思い、毎回トレイいっぱいを取っては食べきれず大部分を無駄にしていた。これは私だけでなく一緒に食事をした仲間全員が同じことをやっていた。後になってカフェテリアでは自分の好きなものを食べられるだけ取ればよいのだということを知った。レジの人もわれわれが到底食べきれないほどの食べ物を取っても一言も文句を言うわけでもなくいつも笑顔で通してくれた。AFSの世話役の人たちからも苦情は一切出なかった。どうせそのうち分かって知っているわざと何も言わなかったのではないかと思われる。この話は今では笑い話になっているが、われわれはカフェテリアの使い方さえ知らなかったのである。われわれはこの後行き先の違う少人数のグループに分かれてアメリカの各地に分

散し、home stayする家庭に引き取られていった。

アメリカ側のAFSは各高校、各地域で組織がしっかりできていて、留学生を受け入れるための資金集めや、いろいろな行事の計画、受け入れ態勢の準備などが綿密になされていた。飛行機代は航空会社の寄付、生活費は原則として留学生を受け入れる家族の負担、通学費は留学生が通う学校の負担と役割が分担されていたが、生徒たちは自分たちの負担を達成するために空き瓶の収集など涙ぐましい努力をしてくれていた。私は今でも、見ず知らずの留学生のためにそれ程まで努力してくれたアメリカ人の寛大さに感謝の気持ちでいっぱいである。

いざ学校へ

私のhome stay先はワシントンDCの北側に位置するメリーランド州だった。私はアメリカ中西部、北東部に行く仲間たちと一緒にプロペラ機でサンフランシスコを発ち、途中で中西部に滞在する留学生を下ろしながらニューヨークに着いた。ニューヨークからさらにバスでワシントンDCに向かった。これは実に長い旅だった。日本からアメリカの西海岸までは12時間ほどの旅だったが、アメリカ大陸の横断には丸一日もかかった。アメリカの大きさを実感した旅であった。

学校は着いて間もなく始まった。私が通ったのはWheaton High School (WHS) という在校生2,400人のマンモス高校だった。この地区はDCの連邦政府で働く人たちのベッドタウンになっていて、当時人口が猛烈な勢いで増加している地域だった。当時アメリカでも有数の富裕地区といわれ、教育に力を入れていた。それだけにacademy courseからvocational

courseまでカリキュラムは充実していた。私は高校3年に編入され、英文学、アメリカ史、民主主義の問題点 (POD)、パブリック・スピーチ (PS)、数学、体育、タイピングのコースを取るようになった。この中で英文学の授業には一番苦労した。というより全然歯が立たなかった。英文学の授業ではBeowulfやCanterbury物語などの古典や叙事詩、ミルトンの失楽園、さらにはシェイクスピアのマクベスの購読が要求された。アメリカ人の生徒の中には授業でマクベス夫人のセリフを本物さながらreciteする人もいてびっくりしたが、私といえば日本からマクベスの対訳本を取り寄せて丸暗記し何とか試験を乗り切った（これは後になって自分の苦手なところを如何にカバーするか、いわばcoping strategyを自ら作るための指針となった）。アメリカ史やPODも予備知識がないため結構大変だった（日本だったら小学校や中学校で習う歴史をスキップしていきなり高校の日本史の授業に出るようなものである）。PSも予め準備できるものとはかく、impromptuスピーチはお手上げだった。でもクラスの中にはユーモアのセンスにあふれる生徒もいて結構楽しい授業だった。数学は逆に易し過ぎる程だった。タイピングはキーを見ないでタイプができるようになり、後で大いに役に立った。アメリカの高校では宿題も結構あったりして勉強は思ったより大変だった。私は留学前ずいぶん英語の勉強をしたつもりだった。それは日常会話のレベルでは役に立ったが、アメリカの高校や大学で普通の授業についていくのには不十分だった。と言ってどうせ通用しないならやらなくても良かったかというところではない。むしろこう

した努力があったからこそ何とか無事に卒業できたとも言える。やはり努力の甲斐はあったと言うべきであろう。

私はそれでも学年の最後のほうには700人中成績トップ50人の中選ばれた。もっとも表彰式では英文学の先生に「何故あなたはここにいるの」と冗談を言われた。私の隣にいた友人は先生が私にずいぶん失礼なことを言うと思ったらしく慌てて「彼は言葉のハンディはあるものの数学では天才的な才能を持っている」と私自身が赤面するような弁明をしてくれた。先生は「わかっているわよ」と言って私にウインクした。私もこの頃にはこれ位の冗談は分かるようになっていた。

勉強には少々苦勞したが、WHSの一年は充実した一年だった。一年を通していろいろな行事が計画されており、勉強以外でも忙しい一年だった。フットボールの試合の見学や、DCの観光名所の見学、他国の留学生との交流をはじめとして、home coming dance, senior prom, moonlight cruise等々、日本の高校生では経験できないような楽しい経験をいっぱいした。そんな中で特に印象に残っているのはTP-ingという悪戯だった。ある日の夕方、アメリカン・ブラザーのDaveが、これから校長先生の家を「roll」しに出かけるが一緒に来ないかと誘われた。何をするのかは一緒に来れば分かると言う。私は好奇心旺盛で直ちについて行くことにした。すると既に10人程の仲間が集まっていた。三台の車に分乗、途中でトイレトペーパーをしこたま買いつけて

校長先生の住まいに向かった。ハウス・ロールというのは夜陰に紛れ、誰かの家をこっそりトイレトペーパーで飾り立てる悪戯で toilet papering を訳して TP-ing と呼ばれていた。私はとにかく皆のまねをして夢中でトイレトペーパーを木の枝に投げかけた。30分ぐらいで校長先生の家の TP-ing は終わり、われわれは意気揚々と引き上げた。翌日校長先生が何と言うか楽しみだった。ところが校長先生は全てを見通した上でわれわれの行動を家の中から一部始終観察していたらしい。「自分の家が昨日 TP-ing されてね、犯人は誰それだ」と、かえって自慢げに皆に吹聴していた。どうやら校長先生はわれわれの行為を自分の人気のバロメーターと解釈したようだった。校長先生は太っ腹でわれわれより一枚も二枚も上手だった。

私がアメリカ留学中にケネディ大統領が暗殺されるという大きな歴史的イベントがあった。それは1963年、秋深まる11月22日午後1時半頃のことであった。私はタイピングのクラスにいた。突然校内放送がありケネディ大統領がダラスで銃撃されたというニュースが流れた。クラスは騒然となったが、その時点では未だ大統領の生死は確認されていないということだった。ところがそれから約10分後に再び校内放送があり大統領の死亡が確認された。多くの生徒が泣き始めた。学校ではその日の残りの授業は全てキャンセルされた。と言ってもすぐに家に帰れたわけではない。普段と違う帰宅時間でスクールバスの手配が間に合

わなかったせいである。スクールバスを待つ間何人かの生徒と話す機会があった。その中には「大統領が死んでも国政にはあまり影響が出ないだろう。何故ならば合衆国憲法は大統領が死んだとき、副大統領がその後を引き継ぐと定めており、国政は滞りなく続いていくだろう、それが民主主義の良いところだ」と、PODのクラスの模範解答のような意見があった。一方で「ケネディ大統領の暗殺を報じた今日のワシントンポストをとっておくと10年後には高い値で売れるぞ」と言う不埒な学生もいた。私はケネディ大統領の暗殺事件が起きたこの頃を境にアメリカの国力が下降に転じたような気がしてならない。

総括

AFSによる高校留学は予想に違わず概ね楽しい日々の連続だった。しかしながら留学による最大の成果はいったい何だったのだろうか。留学による英語力の向上は期待した程ではなかった。もっともこれはもともと私にあまり語学の才能がなかったせいかもしれない。と言うのはAFS同期生の中には宇宙船アポロが人類史上最初の月面着陸を果たしたとき、その実況放送をテレビで同時通訳した鳥飼久美子さんのような人もいるからである。では他に何かあるのか。私が思うにこの留学の最大の成果は外国人ずれしたというか、外国人の中でも物怖じしなくなったことにあるのではないか。それがその後アメリカの大学院に留学し、また北米の大学で教えることになった布石になったような気がする。

読者の声投稿募集中! 『心理学ワールド』への、ご意見・ご感想をお待ちしています。投稿は、お薬書・Eメールどちらでもけっこうです。世代と性別をあわせてお知らせください。
●送付先 〒113-0033 文京区本郷5-23-13田村ビル 公益社団法人 日本心理学会